

震災を多くうたはず **本田一弘**

「角川短歌」七月号、米川千嘉子の「三十六色ペン」三十一首を興味深く読んだ。その中に次のような歌がある。

・小鳥・犬こゑのびやかな『黒松』の千首に八首のみ震災のうた
・震災を多くうたはず少年と犬・馬・小鳥をよみし牧水

『黒松』は、若山牧水の第十五歌集。没後十年してから妻の喜志子によつて昭和十三年に出された遺歌集であり、大正十二年から昭和三年までの作一千首が收められている。

一首目の「震災」とは、勿論大正十二年九月一日に起きた関東大震災のことである。『黒松』を読んでみると、確かに米川の歌うように震災を直接的に歌つた作品は『余震雜詠』と題された八首しかない。それらにはすべて「地震」または「なゐ」という語が使われている。沼津に暮らしていた牧水にとつてはそれほどの被害はなかつただろう。しかし、直接的な被害は受けなくとも何かしら影響はあり、その影響が作品の上に表れているのではないだろうか。小鳥・犬・馬・少年が数多く歌われている一方で、「地震」の歌が千首のうち八首のみであるという事実は重い。

「短歌研究」の二〇一四「年鑑」で行われた座談会で小島ゆかりや三枝昂之が俵万智について発言していたことがここ半年ずっと気になつていた。

小島「：被災地から離れたにしても俵万智さんはほとんどそ

ういうこと（＝震災。※筆者註）に触れず、南の島の生活を歌つてゐる。ああいう態度というのもあると思うんですね。：俵さんは、腹をくくつたように歌わないですよね、そういうことを。」

三枝「：僕は、震災に関する俵万智さんの作品は大テーマだと思っているんです。意識的に石垣島に限定して日々の暮らしを歌つてゐるけれども、あの日々の明るさとか屈託のなさの背後に自分が何を抱えているかということを、浮き上がらせるために狭い日常に限定してると読むこともできる。：」

震災詠といふと、震災に直接的に遭い、今も被災地あるいはその近辺に居住していたり、故郷を離れ避難生活を続けたりしている人々の、いわゆる「当事者」の歌が採り上げられることが多いつた。二〇一二年の高木佳子『青雨記』、三原由起子『ふるさとは赤』、今年になつて佐藤通雅『昔話』、波汐國芳『渚のピアノ』、梶原さい子『リアス／椿』と作品的にも評価の高い歌集が続々と出版されており、けしてそれらの作品の意義や価値を否定するものではないが、果たして「当事者」の作った歌だけが「震災詠」と言えるのだろうか。小島や三枝の発言を読んで、俵万智のようになえて震災詠を作らないという歌人としての生き方もあるのではないかだろうか、と思つたのである。震災から三年経つた今頃になつて、遅ればせながらそんなことに改めて気づいた。

全ての人が震災の「当事者」であるなどと結論づけてしまふと何かありきたりなものになつてしまい、しつくりこないが、あえて震災を歌わないという選択肢もあるということを視野に入れつつ震災詠の問題を考えなくてはならないのではないだろうか。